

多様化する親子支援のための専門性定着研修

社会福祉法人 ベタニヤホーム 母子生活支援施設ベタニヤホーム
〒130-0022 東京都墨田区江東橋 5-4-1

助成事業の概要

母子生活支援施設には、様々な困難を抱えた母子家庭が入所するため、施設職員は多様な支援を求められている。施設職員は日々の研鑽が必須になるが、以下1～3の研修を通して、施設職員個々のスキルを上げ、強固なチームアプローチを行い、多様なニーズに対応する様々な支援を提示、提案及び実施できるようになることを目的とする。

1. 研修報告会

内容：各職員が受講した研修内容を発表する。
意図：アウトプットすることでインプットの質的向上を図る。
頻度：三か月に一回
その他：各月の発表時に聴講者からのフィードバックを受ける。

2. ケースワーク講習会

内容：抄読会を実施する。各章の発表担当を決めて行う。
意図：アウトプットレポートを行うことで理解を深める。

頻度：毎月一回

その他：『ケースワークの原則』をテキストとし、参考図書として、『アサーション』と『DVと虐待』を使用する。

3. 児童精神科医によるスーパービジョン

内容：児童精神科医を講師としてお招きし、施設のケースについて医療的見解をうかがう。提出するケースは施設内で検討し、担当者がケースの概要や課題等をまとめる。

意図：医療的見解をうかがうことで、多角的に捉

え、支援に幅と厚みを持たせる。

頻度：年に五回

その他：全く利用者を知らない外部の専門家に対し、情報の取捨選択を行い、支援課題や困難な点を明確に伝える力を高める。

事業の成果

1. 研修報告会

外部での研修により、新たな知識を施設に持ち帰り発表した。内容をまとめ、他職員に新たな知見を伝えることにより、発表者自身の知識がより定着したと考える。特に複数人で赴いた研修は、個人だけでなく、グループの中でもまとめる必要があり、何度も反復したことが、より記憶への定着に繋がったと思われる。また発表し、質疑応答を受けたことにより、記憶の定着が進むだけでなく、新たな疑問や見解を見出すことができ、次に必要な知識や情報が明確になり、新たな取り組みへとつなげていった。

2. ケースワーク講習会

日々の支援の中で理論的な部分を失念しがちである。支援者として基礎理論を学ぶこと、再度見直すことにより、自身の支援と理論を結びつけ、専門家としてスキルアップするきっかけとし、より高みを目指した支援を行えることを目標とした。各章を担当制にすることで、各職員がテキストを読み込み、要点を抑えることができた。また要点をまとめて発表することにより、知識がより定着したと考える。その上で、職員間で議論を行い、より理解を深め、新たな見解を得て支援に臨

んでいったと思われる。また前半後半それぞれに講師を招き、キャリアアンカーとして学んだ理論と自分自身の支援を考える機会を得た。各自で本を読むだけでは得られない知見や見解を得られたと考える。

3. 児童精神科医によるスーパービジョン

施設内のケースカンファレンスだけでは見いだせない医療的見解をうかがうことで、新たな角度から支援を組み立てていった。また医療の現場での新たな知見や療法等を得る機会となった。児童精神科医にケースを伝えるために、要点を絞ってまとめる必要がある。その際に上記 2 点の研修報告会とケースワーク講習会での学びを生かすことにより、より明確に伝えられるようになったと考えられる。

成果の広報・公表

助成を受けた研修の成果にあって、広報は実施せず公表も限定的に行うことにした。理由として具体的な事例を持ち出した事例検討にあっては、個人情報の推測につながることを想定されるため、実施しなかった。

毎回の研修については記録を取り、レジュメを準備したため、助成元への説明資料としては確保できていることを理由として、広報は実施せずという判断を行った。また、公表についてもケース検討が申請した研修の中に含まれており、職員による抄読会では職員による発表レジュメに代えることができると判断した。

これらは令和 5 年度に実施した施設内研修として当法人の事業報告に記載予定である。

今後の展開

今回は支援者として基本的な理論を学び、支援を立ち返ることを中心に取り組んだ。抄読会を初

めて経験する職員もおり、経験が浅い者にとっては、これからの支援を考える上で大切にすること、心がけること、支援者としての軸となる部分を強化することに繋がったのではないかとと思われる。経験が長い者にとっては、自身の支援を理論的に振り返ること、初心に戻ることで、より厚みを持たせた支援を展開していくことが期待できる。

上記の抄読会にて、輪番で発表することにより、研修発表会での発表の仕方にも違いが出てきたと思われる。これまでは研修内容を要約して伝えることがメインであったが、研修を受講した本人が他職員に伝えたいと思ったこと、その理由を伝えることで、受講者主体の発表に変化しつつある。聴講する方も、研修内容と受講者がどのような所に受講してきたかの両方が伝わってきて、関心が深められるようになった。研修発表会にて議論ができるようになることを期待する。

児童精神科医のスーパービジョンでは、うかがった医療的見解を軸に、より多角的視点を持って、支援を立体的に組み立てていけるようにしていきたい。また新たな療法等を取り入れ、職員各々がスキルアップを目指し、支援の幅を広げていきたい。